

平浜八幡宮 『鷹図絵馬（一对）』に関する考察

— 松平直政の奉納動機について —

猿 田 量

はじめに

松江市の平浜八幡宮には興味ある絵馬がいくつか伝わっている。絵馬のより古い形態を伝えているとみられる木製の馬像や法橋狩野永雲筆の『松に鷹図絵馬』などであるが、なかでも興味深いのは松平直政が寄進したと記録されている『鷹図絵馬（一对）』である。

この一对の絵馬は特異な特色を有する。左右一对をなすよう制作されること自体は、室町時代前後に黒毛の馬と白毛の馬を描いた絵馬を一对として奉納する習慣が成立して以来の通例、むしろ一原型としえるのであるが、左右の各面で横書き文字の列の方向を逆転させてまで対称性を用意するのはあまり類例を見ない。また年月日の記はあるが、絵馬奉納の目的である願い事についての文言は見出だせない。願いがひそかなものであったとしても、その詳細を避け『諸願』として記す、しばしば見られる形態さえとっていない。この絵馬に託された祈願は記す必要のないほど明瞭なのであろうか。あるいは隠されているのであろうか。さらに年記に言う寄進の時期は、寛永十五年の直政の出雲転封の翌々年であ

り、金箔張りの作品の制作期間を考慮すると松江入府そうそう発注されたと考えなければならぬ。そのような急ぎの寄進を促した理由があったとすればそれは何か。

以上の画面内部および寄進の時期をめぐる特徴から、この一对の絵馬の奉納動機は考察に値するであろう。以下、造形、記載された文言、顕著な対称性、鷹という画題の選択理由を検討し、できるかぎり奉納動機の推定を試みたい。（注一）

I 造 形

まず、美術品として造形特質を記述により明確にしておきたい。この二面の絵馬が構想の段階から一对であるのは明らかである。両面ともに同じ高さに横木が描かれ、その下に青い布が下がっているため、画面は金箔の背景と布地とがなす黄色対青色という色面に大きく分割されており、その色面の境界を横切るように鷹の身体が配されている。左右を通じて上下色面の見掛けの面積と鷹の身体の見掛け面積から揃えられてお



平浜八幡宮『鷹図絵馬（右面）』

り、従って左右両面を通じて色面間の比例から受ける印象は均衡するようになる。

こうした共通性が確立された上で、両面の対比が図られている。左右の鷹は向かい合うように横顔を見せるが、身体の前面を見せる左面の鷹が嘴を開き、片足を挙げるのに対し、背面を見せる右面の白鷹の嘴はとじられ、横木に堅く止まっているとみられる脚は尾羽根に隠れて爪が僅かにのぞくのみである。鷹の繋ぎ紐も右面では纏めて編まれて下に垂れるのに対し、左の紐は等量が費やされると見えるが、とき広げられ、三箇所結びれて装飾的な二つの逆アーチをなしている。紐の色は右では白と赤、左では赤と緑という鮮やかな対比をなすよう選ばれている。ここでの色彩対比は、金地の布地の黄対青、紐の白対赤と赤対緑が意図されており、さらに白鷹とその結び紐の白が文字の墨の色と対比されていると考えれば、近代の色彩学で言う補色対比と同等のことが行われている。

総じて右面の静止と左面の運動という対比があり、両面が併置された場合、見るものの視線は、文字を含む面を読みとる流れに従って、まず右面に向かい、白鷹の瞳に至るまで静止する様子を見てとった後に、左の鷹が瞳を凝らし、やや翼を広げかけて何ものかに反応しようとする動勢を見せる姿へと導かれるであろう。言わば蕾と開花の差を示すかのようであり、左面の方が変化に富むのであるが、激しい運動を示すというより、尾羽根を青い紗の布地ごしにのぞかせると言った静的な範囲に止どまっている。この青紗の半透明の効果を得るために、布地の部分の青色の絵具の塗りはかなり薄く、右面の布地部も同様であるが、その薄い絵具層は左右面共に、雨などを被った部分が、水滴の染み跡をとどめて



平浜八幡宮「鷹図絵馬（左面）」

おり、またさほどでないにも拘らず褪色が著しいかのような現状の感じをもたらず原因となっている。

画家は描線の抑揚を控えており、かなりの力柄のものが丁寧な仕事をした事がうかがえる。しかし、画面に現れているもののみからは所属する流派の推定は困難である。

II 文言

画面には左右両面とも三種のことをしめす文言があるのみである。八幡神への奉納を記すものが画面上部に横書きされ、寛永十七年二月の年月を画面端部に縦書きし、奉納者は「刺史敬白」となっている。

両面にある文言は左右同一であるが、対称をなすべく配列され、上部の横書き文字列の流れは右面では左から右へ、左面では右から左へとなっている。

奉掛八幡大菩薩御寶前

寛永歳舎庚辰蜡月吉祥日

刺史敬白

この年記は寛永十七年十二月を意味するが、ここで奉納の年月と「刺史敬白」の二点を検討してみたい。

近世の出雲地方には幕藩体制下で堀尾氏と京極氏が相次いで封じられたが、共に三代を経ずして断絶し、その後松平氏が信濃より移封された。この三氏は出雲入国後、軌を一するかのように平浜八幡宮を尊重す

る行為を示したことが記録に残っている。

平浜八幡宮は杵築・佐太の二つの大社の勢力が大きかった出雲地方にあって、いずれの支配をも受けず、出雲南東地域に特別の地位を保っており、八幡宮であることから、とくに武家の尊敬を集めていた。戦国時代には毛利氏の社領寄進の記録もある。

『八束郡史』によれば右の三氏は入国後、そろって社領の寄進を行って当社を保護している。その間の事柄を年月順に記すと次のようになる。

慶長6年 関が原の役後堀尾家出雲に封ぜられる

同年4月 社領五〇石を寄進

寛永10年 堀尾家絶える

11年 京極氏出雲に封ぜられる

同年9月 社領四五石を寄進

寛永14年 京極氏絶える

寛永15 松平直政出雲に移封される

同年12月 社領五〇石を寄進

17年12月 鷹図絵馬一対を奉納

（この松江藩と平浜八幡宮との関係は『八束郡史』『竹屋村平浜八幡宮文書』の項による）

三氏はともに入国早々にほぼ同石高の社領の寄進を行ったのが見て取れるが、新たに入国した大名が地元有力社寺を保護し、社寺領を寄進することは珍しいことではないとしても、同一の封土で僅か三十六年のうちに三度も繰り返されるといえるのは、大名の改易が多かった幕藩体制

の初期でもそう多くはなかったと思われる。とくに、自家に先立つ二つの大名家が藩主病死という同一の理由により断絶した後をうけて入国した松平にとっては、不吉な先例の連続を目の当たりにし、かつ社領の寄進があまり効を奏すことなかったとの感にとらわれたとしても不思議ではない。その不安が、先の二氏と同様に社領を寄進した後、それら先例との差別化を図るために絵馬の奉納を追加させたのではないであろうか。祈願の内容は病死改易の不運に子孫が見舞われぬようにであり、また順調なる統治の成功である。

古い時代の本来の絵馬、すなわち天候を祈願する絵馬にあっては、祈願の内容とするところが止雨にせよ降雨にせよ、馬の毛色によって明らかである以上、願いについて記すことを無用としていたのに対し、いわゆる大絵馬では祈願の内容が多様化するとともに画題も馬以外にも拡張し、「武運長久」などの祈願の内容の文言が画面内に記載され、詳細の告知を避ける場合には「諸願」と記す傾向をみせて近世にいたるが、この『鷹図絵馬（一対）』は、専門絵師の手になり、長く保存され、展示されるべく（現在は屋内に保管されているが、社殿の軒に掲げられていた時期があった）、すなわち大絵馬として作られているのは明らかでありながら、願い事についての記を欠くのは、その内容が松平直政にとつてまた家臣にとつても、おそらく領民にとつても余りにも自明であったからと考えられる。あるいは、病死改易の懸念は表立ることさえ控えるべきであったかもしれない。

一方、「刺史敬白」という文言も絵馬上の記入としては異例に映る点がある。「刺史」という言葉そのものが古代中国の官職名であり、いかなる時期の日本の政体にも存在せず、従って正しい意味においてこれを

自称とし得るものは有り得ない。江戸時代の幕藩体制の大名が漢文の文章中で自己をあらわすのに際し、この刺史という中国隋唐代の州長官の職名を代用することはありえたとと思われるが、社前に奉納される絵馬においてその様な自称を採用する必要があったとは思われない。

この「刺史」という自称にも、出雲入国当時の松平直政の状態がうかがえるかもしれない。信濃松本より出雲松江への移封は、直政にとり石高の倍増であったが、出雲一国をえたために、江戸城内の処遇が格別となる国特大名となりえたことにも大きな意味があった。それは雲州刺史などと藩主が自称をもてあそぶ可能性を開いたのであるが、そのような遊びのみが「刺史敬白」の文言を用いさせたとも思われない。

出雲地方は戦国時代には尼子・毛利の争奪の場となり、幕藩体制でも二回の領主の交替を経験している。有力な戦国大名の滅亡後、その統治の色に染め上げられた領民が残るといった土地ではなく、言わばしばらく無主であったような印象があり、旧主を慕う遺臣や領民を新服属せしめるのに新領主に多大の苦勞を強いるような土地というより、つぎつぎと支配者が交替してきた行政区の感があったのではないだろうか。直政にとつては、大名としての領国支配よりも、徳川政権の親藩の中で最も西方に位置する存在として西国大名との対峙が重要なこととして意識されていたはずである。その役割は次世代に引き継がれ続けなければ成功とは言えず、その最大の障害となりえるのが世継ぎの病死の懸念であるとするれば、土地に古くからある平浜八幡宮に、新任の行政官であるかのように挨拶を促し、それが「刺史敬白」の文言となったのではなからうか。

III 画題としての鷹

絵馬の画題が多様化し、馬以外の題材があらわれたが、その諸題材中で鷹は希少な例ではなく、むしろ武家は鷹を好んで絵馬を描かせている。従って、武勇の神である八幡神社に、武家が奉納する絵馬の画題として鷹を選ぶ可能性は大きい。しかし、鷹が松平直政にとって有する特別な意味に注目し、絵馬中の鷹の取る姿勢を一つの図像として系譜を辿るならば、単なる武家の鷹好き以上の意味を見出だしえるかもしれない。

徳川家康は死後久能山東照宮にまつられ、東照宮は全国の大名領に分社されて続々と建立されたが、川越の東照宮は建立も、建築の整備も比較的早くなされている。そこに付属する喜多院と呼ばれる寺院には、鷹を描いた十二面の絵馬が寄進されており、その中に本論で問題としている平浜八幡宮『鷹図絵馬』との類縁を感じさせる二面が含まれている。

寛永十一年から十三年にかけて徳川家光は日光東照宮を造営した。それに前後して、川越城主阿部重次が自領内の東照宮および喜多院を造営し、寛永十四年喜多院に『繪鷹十二聡』を奉納した。それは鷹好きであった家康の霊をなぐさめるために重臣として仕えた重次が当時の狩野派の総師狩野探幽に描かせたものである。これらの事情から、ここで鷹モチーフが選択された理由を推測するならば、故家康の並み外れた鷹好きとそれゆえの鷹たちへの熱愛がまずあり、それを親しく知る重次が、家康の霊のための東照宮にさらに鷹図を加えるべきと考えた、という個人的な動機にもとめられることになり、武家の一般的な鷹好きをこえた所にあることになる。

この十二面はそれぞれ各面に一羽の鷹を描き、姿勢、方向、上下への動き、羽の色などの多様性をもって描き分けられているが、おおむね二

面ずつ対比的な一組として構想され、あわせて六対を為している。画面には特別な文言はない。動態から静態まで鷹の一二態を描出するが、さらに繋ぎ紐や止まり木の飾り布の色と形の変化をも併せて演出されている。この多様性の追究はたんに生態の諸相を充分に表示する動態から出た以上に、家康遺愛の鷹たちの肖像の提示であったかとさえ思われる。

東照宮を鷹の一二態を活写して飾る、わけでも遺愛の鷹の肖像で荘厳とするような動機があったとすれば、それは故家康とその重臣重次の個人的関係の表明に他ならないであろう。その六対中に、静かにむかいあうかのような一対が含まれている。平浜八幡宮の『鷹図絵馬』は、この喜多院鷹図絵馬と何等の関係を有していると思われる。とくに、向いあう一対はその鷹の姿勢の類似が何らかの引用関係を推測させるものがある。

鷹好きで名高かった家康に対し、身近ではなかったが敬愛する祖父としての感情を隠さず、その孫であることに誇りを持っていた直政にとって、川越東照宮絵馬において阿部重次の先例が示した、故家康との個人的関係を鷹図絵馬により表明しえるという可能性は非常に重要な示唆となったと考えられる。すなわち、鷹は単なる武家の鷹好きをこえて偉大な祖父の趣味としての鷹狩好き、鷹好みを踏襲する行為となり、直政当人と家康との個人的関係を表明するという意味を有していたと思われる。

『鷹図絵馬』を描いた画家にとっては、まさに二年前に描かれた、当時最有力の画家探幽の力作絵馬は無視しえないものであったはずである。但し、『鷹図絵馬』は、『絵鷹十二聡』の抑揚に富みかつ揚達な探幽の筆勢を追おうとはせず、はるかに抑制された筆づかいを取っている。

松平直政が自ら川越喜多院の『絵鷹十二聡』を見て絵師に対し、範となすべく指示したというような推断をすることは出来ないが、徳川家光

が行った諸大名を率いての日光東照宮への参詣には、直政も加わっていたはずであり、その往復の途上、直政自身がまた周辺の人物が喜多院を訪れた可能性も大きいと思われる。

おわりに

平浜八幡宮『鷹図絵馬』は、松江藩に二度生じた病死改易が松平家にも及ぶことを防ぐために、土地の代表として出雲南東部の有力神社であった当社に奉納された。絵馬画面内の刺史という文言には、家康の孫としての直政の西国への赴任の気負い窺い得る。鷹と言う画題には、武道の神の八幡神への奉獻として、武家の鷹好きが選ばせたという選択理由が考えられるが、さらに、家康の鷹好きを、鷹図奉納によって供養するという動機が重ねられ、さらに、新領主直政が家康の系譜に連なるものであることの表明をも重複させる、といった多層的な役割を負わせるべく鷹というモチーフが用いられるとみられる。西国大名と対峙する領土における統治の成否という、いわば軍事に連なる祈願内容は「大絵馬」にふさわしいが、そこに鷹好きをめぐる家康への複雑した個人的関係の表明という「小絵馬」にふさわしい動機を直政がひそませていたと考えられる。

注一 この問題については、以前「対をなす絵馬について」（島根県立博物館ニューズ27 昭和56年6月）として論じたことがある。ここでは主として造形的側面を考察した。